

サカテカス攻略

サカテカスの戦いは反ウエルタ革命戦争中最大規模で最も凄惨な戦争となった。サカテカスは人口三万の古い鉱山の市で、周りを取り囲む絵のような自然の美しさに、包囲する兵も守る方も共に感動した。両軍にとってサカテカスは戦略上の重要拠点で、鉄道の接続点であり、北からメキシコ市へ進軍するためには、先ずこの市を占領することが求められた。サカテカス守備隊長ジェネラル・ルイス・メディナ・バロンが自信に満ちていた理由は、自然の要害にあった。市を攻撃するためには先ず、取り囲む高い丘を越えなければならなかった。サカテカス攻略にはビヤが得意とする騎兵攻撃は出来なかった。メディナ・バロンは市を取り囲む最も高い二つの丘、エル・グリヨとラ・プファの上に重砲陣地を築いていた。ゆっくりとこの丘を攻めあがってくる歩兵部隊を、上から重砲と数で圧倒する守備隊により一挙に殲滅することが出来ると彼は確信していた。この戦術はナテラの軍に対して成功した。メディナ・バロンはビヤ軍に対しても同じく成功すると信じていた。しかも七千が新しく援軍として到着し、守備軍は一万二千に膨れ上がっていた。メディナ・バロンが自信に満ちていたもう一つの理由は、彼の兵士の士気が盛んであったことである。侵略してきたアメリカ軍と戦う、という間違った信念でウエルタ軍に入った志願兵がたくさんいた。彼らはアメリカ軍ではなくビヤ軍と戦うということを知らなかった。そのほか、ビヤに捕虜になれば処刑されると信じていた歴戦の勇士、トレオンで中国人を虐殺したベンハミン・アルグメドが率いるオロスコ軍がいた。¹⁰⁹

ビヤはトレオンでの戦術とは異なったものが必要であることに気付いていた。彼はアンヘレスに攻撃作戦の構築を依頼した。サカテカス周辺を具に偵察し、北部師団は優勢な砲兵隊と兵力をフルに生かして、長期に亘る包囲戦を避けるべきであると、アンヘレスは提案した。突撃部隊は市の周辺に配置し、全ての方向から同時攻撃を仕掛けること、北部師団の砲兵隊を連邦軍の砲台のあるラ・プファとエル・グリヨ周辺に集中させ、連邦軍の大砲を破壊する事、又は、北部師団の歩兵部隊を二つの丘に向けて突撃させ、連邦軍の砲弾を彼らの部隊に打ち込ませる戦術を取る事、であった。多くの連邦軍が駐屯するアグアスカリエンテスから、オロスコが強力な分遣隊を率いてサカテカスに向かうことが予想された。それに備えて、市の出口、特にサカテカスとアグアスカリエンテスを結ぶ道路沿いにあるグアダルルーペの町に革命軍を集中させることにした。これにあたる部隊は増援部隊の侵入を防ぐと同時に、守備兵が撤退するのを阻む役割があった。ビヤはアンヘレスの作戦を承認した。¹¹⁰

6月19日、北部師団はサカテカス近郊に到着し、次の日には散発的な小競り合いが始まった。ビヤは市を攻撃することを厳禁していたため、戦闘は攻撃を仕掛けてくる連邦軍の前衛兵相手であった。6月22日に到着したビヤは包囲戦の指揮を取った。彼は戦線の後方に残らず、攻撃縦隊の一つに加わった。1914年6月23日午前10時、革命軍の

サカテカス攻撃が市の周囲で一斉に開始された。エル・グリヨとラ・ブファの攻略が最も重要な作戦であった。この要塞を陥落させると、連邦軍は重砲を失い、革命軍は市全体を制圧することが出来た。この二つの丘で最も血なまぐさい戦闘が行われた。連邦軍指揮官メディナ・バロンは自らラ・ブファで防衛の指揮を取り、頑強に抵抗した。アンヘレスは二つの丘を二十九門の砲で取り囲み、二つの砲台へ向かって間断なく砲弾を打ち込んだ。ラ・ブファに隣接した丘にあるエル・グリヨは間もなく抵抗する力を失った。午後一時前、エル・グリヨは革命軍の手に渡った。

連邦軍はパニック状態になった。サカテカスの陥落を悟ったバロンは市から全軍の撤退を命じた。彼らは連邦軍の別の部隊と合流するため、サカテカスからアグアスカリエンテスに向かう道を辿った。彼らが向かうグアダルーペには七千の北部師団が行く手を遮っていた。逃走する連邦軍千五百人は四門の砲と、多くの機関銃を持っていた。数時間前までは堂々としていた連邦軍は混乱のうちにサカテカスを離れた。女子供も兵士に混じって逃げた。哀れなソルダダラたちは身の回りの物を担いで走った。何とか命だけは助かろうとして、多くの馬には将校が二人乗っていた。グアダルーペに向かう道や丘は死体で覆われた。連邦軍は死者六千人、負傷者三千人、憲政軍は死者千人、負傷者二千人、そして数多くの市民が死傷した。¹¹¹

109. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P348

110. Ibid. P349

111. Ibid. P353